

著者と海外の読者をつなぐ、 限りなく透明な「欧文組版」

コントヨコ



みなさんは、本や冊子などの読み物のページを開いたとき、何を考えるでしょうか。

何も考えることなく、スーっと内容に入り込めたら、そして、読み進めていく中で、内容以外のことに何もとらわれずに読み終えることができたとすれば、その中面を作ったデザイナーは良い仕事をしたといえます。

デザインには「見せるデザイン」と「支えるデザイン」があります。本のカバーや展覧会のポスターなど、人々の注目を得るためには「見せるデザイン」が必要です。しかし、読み物の内容を読者に伝えるためには、その内容を「支えるデザイン」が必要になります。私の仕事は、この支えるデザイン「レイアウト／組版」です。日本語の読み物もちろんいたしますが、専門は「日本から海外の方へ向けて発信される読み物」の欧文組版です。

「欧文組版」には、日本語の組版とは異なるマナーやルールがたくさんあります。そのマナーやルールが守られていないと、読者に雑で稚拙な印象を与えてしまい、せっかく翻訳し海外に伝えようとした内容そのものの信頼を落としてしまう可能性があります。海外の方に安心して読んでもらうためには、「翻訳された文章の質」はもちろんですが、その文章を読者に届ける「組版の質」もとても大切です。

例えば、ここでひとつ例を見てみましょう。

1877年に東京大学が創立され、岡倉天心は入学した。

この英文を組版した際、よく次のような例が見られます。

Tenshin OKAKURA |was among the students at TOKYO UNIVERSITY
when it was first established in 1877.

ここには、少なくとも 2 つの大きな問題があります。試しに、この組版の印象を日本語組版で再現してみます。

1877年に**東京大学**が創立され、**岡倉**天心は入学した。

お気づきになりましたでしょうか。

1 つは「固有名詞を大文字で組んでしまっている」ために、必要以上に強調した印象になっています。日本語から翻訳されたものでは、会社名や人名を本文中ですべて大文字（All Caps）にしているケースをよく見かけるのですが、主要な英語辞書（Merriam-Webster's など）に All Caps で掲載されている場合（NASA など）と、アルファベットの音で発音する固有名詞（TDK など）以外は、単語先頭のみ大文字の形式（Caps and Lowercase）にする必要があります。このルールを守らないと、著者が意図していない言葉を強調することになってしまい、読者に著者の意図が正しく伝わらなくなります。

もう 1 つは「書体選定」が間違っています。この書体は見出し用書体です。書体には、見出し用と本文用があり、見出し用は比較的大きな文字で使う前提で設計されていますので、本文の文字サイズで長文に使うと、とても読みづらくなり、読者を疲れさせてしまいます。

私の仕事の面白さの 1 つは、欧文書体を扱うことです。例えば「Helvetica」という書体はとても有名ですね。これまで「書体は Helvetica をお願いします」と依頼した経験のある方もいらっしゃるかもしれません。私もそのように依頼を受けたことがあります。理由をたずねると「何となく」「よく聞くゴシック体（サンセリフ）だから」「何となくカッコいい気がして」など、指定は明確なのに理由が明確なことはありません。

Helvetica は、見出し用書体です。そのため、本文で 9～14pt 程度のサイズで使ってしまうと、文字間隔がキツく、黒々してしまい、残念ながら読みづらい組版になります。書体は文字そのものの形だけではなく、1 文字 1 文字の字間のアキ具合も書体デザイナーによって調整されています。本文用の書体は、このアキ具合がややゆったりめなのですが、Helvetica は大きな文字サイズで使ったときにちょうどよく見えるよう、キツめに調整されています。そのため、Helvetica を本文に使いたい場合は、組版者が文字間隔を手で広めに調整するなどの工夫が必要ですが、それよりも、本文用に字間や文字の形が調整されてデザインされている Helvetica に近い印象の書体を選定した方が、グッと読みやすい組版になります（2019 年に、ようやく Helvetica Now Text という本文組版向けの Helvetica 書体が発売されました）。

また、Century という書体も、みなさんのパソコンに入っていますので、欧文組版でも使われていることがよくあります。ですが、この書体はかなりレトロな印象を与えます。本文の内容に合わせて選定したのであれば良いのですが、「パソコンに Century と Times があつたけど、Times だとつまらないから Century にしよう」という感じで選ばれているのであれば、それはとても残念な選定です。少し大げさに聞こえるかもしれませんが、Century で組まれた書籍は、たとえ 2019 年の出版物でも、まるで 50 年も前に出版され

たかのような印象を与えてしまうでしょう。このように、書体選定や選定者へのアドバイスも、質の良い組版にはかせないもので、私の重要な仕事のひとつです。

この仕事に就くまでの、私の少しユニークな道筋もお話させてください。

1980 年代後半、まだ会社に PC が無い時代、私はデータ入力のためにキーパーンチャーとして入社しました。文字入力は会社の研修で身につけたのですが、当時「ブラインドタッチ」でキーボード入力できる人材はかなり重宝されました。

その後、専門職の派遣社員として、ある銀行の国際部門にてクライアント向けの書類を作る仕事につきました。そこでは、私から見たら雲の上の方々、正にエリート社員の銀行員のみなさんが、当時まだ 20 歳前後だった私に、クライアント向けの書類作成が重要な仕事であること、そして海外の文化やマナーについて、たくさん教えてくださいました。その銀行で数年勤めた頃、個人的に好きだった音楽への気持ちが高まり、1 人で 5 週間ほどアメリカに行くために離職しました。

帰国後、また仕事を始めなくてはと思っていたところに、「英語の文字入力」の仕事の依頼がありました。アメリカから戻ったばかりで「もっと英語の勉強がしたいな」と思っていた矢先の依頼でしたので、運命的なものを感じながら、さっそく翌日から仕事を開始しました。

この会社は、日本の文化・文学・語学について、海外向けの英文書籍を作る出版社でした。私の仕事は、翻訳者がタイプライターで作成した紙原稿を、DTP 用のデジタルデータにするために文字入力をするものでした。この頃にはようやく、会社に PC が数台あるという時代になっていましたが、自分専用の Mac を与えられ、自分の入力した文字がデザイナーや編集者の手で本になっていく様子を見ることが出来る仕事は、とてもワクワクするものでした。

文字入力の仕事を通して、英文の校正記号の使い方や、欧米人の手書き文字にも慣れていき、そのうち英文独自のルールがあることにも気がつき、自然に覚えていきました。

同時に、写植からデジタルへの移行期であったため、重版の際に必要なコピーライトページ（日本の書籍の奥付部分）だけをデジタル化する仕事を任されました。実は、これが現在の仕事に大きくつながっています。前の版のコピーライトページを見て、何の書体が使われているかを、書体見本帳とじっくり見比べながら探していきます。その作業の中で、欧文書体には同じ明朝（セリフ）のようでも、異なるデザインの書体がたくさんあることを知りました。そして、見つけた書体を使い、本の寸法を測って版面のサイズを出して、レイアウトソフトでその 1 ページだけを作成します。その作業を数百冊分もしました。この仕事は本当に書体を見る目を養う良いトレーニングになったと思います。

組版の仕事は、まず文字修正からスタートしました。そして、当時のアートディレクターから本作りやレイアウトのおおまかなポイントを少しずつ教わり、見よう見真似でアートディレクターが作業する前段階のデータ作成までできるようになりました。そしていよいよ組版を最初から最後まで任されるようになります。組版をして修正を重ねていく作業は、私と英語ネイティブの編集者たちで行いましたが、複数ある修正方法のチョイス、ハイフネーションの整え方、ウィドウ／オーファンの解消方法など、欧米人の目で見た組版への赤入れに対応していく作業は、私の欧文組版のスキルを鍛えてくれました。その繰り返しにより、欧文組版の良し悪しを見る目も養われたのだと思います。

この出版社で仕事を続けて 15 年近く経った頃、ベテランの編集者たちが会社を離れ、独立したり転職したりするようになりました。その方々が、私個人に仕事を依頼してくださるようになり、ありがたいことにその数がかかなり増えたため、私も独立してフリーランスとして現在の仕事をするに至りました。

独立後、前の会社では当たり前だと思っていた欧文組版のノウハウやスキルがなくて困っている方にたくさん出会いました。そこで「何かできないか」と思い、欧文組版に関するブログをスタートしました。そのブログに目を留めてくださった DTP 業界の著名な方から、欧文組版のセミナーをご依頼いただき、これをきっかけに、今も不定期ですが、一般向けや企業向けの欧文組版セミナーを開催しています。

そのセミナーでもお伝えしていますが、欧文組版は、単に原稿をレイアウトソフトに流し込んで終わりではありません。適切な「書体選定」「行の長さや行間」「組版ルールに基づく文字への処理」「単語の流れや余白のリズム」など、たくさんの知識やスキルに基づき細やかな作業をします。その目的は、組版の存在を読者に気づかせないことです。組版が限りなく透明に近づいたとき、主役の読者と著者がしっかりと結ばれます。私の仕事は、著者の作品が海外の読者と結ばれるための橋渡し、組版作業はそのための心遣いです。

これからも、著者と海外の読者をつなぐ質の良い欧文組版、そして、日本全体の欧文組版の底上げに力添えできるよう、努力していきたいと思います。

コン トヨコ
（エディトリアルデザイナー／欧文組版コンサルタント）

東京生まれ。書籍デザイン、組版 DTP、企業・一般ユーザー向け組版セミナー、欧文組版監修、欧文組版コンサルティング業務に携わる。『定番フォントガイドブック』（グラフィック社）組版セクション、モリサワパスポート『英中韓組版ルールブック』欧文組版セクションを執筆。『+DESIGNING vol. 44』日英併記・欧文組版関連記事を監修。日本タイポグラフィ協会会員。

Copyright(c) 2019 Toyoko Kon & TranNet KK all rights reserved



株式会社トランネット
〒106-0046 東京都港区元麻布 3-1-35
VORT 元麻布 4 階
<http://www.trannet.co.jp>